The Japan Lung Cancer Society

P1-13 径3cm以下末梢型肺腺癌におけるHRCT所見と予後（第二報）

南　和徳[1]・芦澤　和人[2]・井上　啓爾[3]・小原　則博[3]・赤嶺　晋治[4]・永安　武[4]
[1]長崎市立市民病院　放射線科；[2]長崎大学　医学部　放射線科；[3]長崎市立市民病院　外科；[4]長崎大学　医学部　第一外科

【目的】病理形態分類（野口分類）は，治療方針の選択や予後の推定に有用とされるが術後に初めて判明するものである．そこで，術前のHRCT所見から，末梢型肺腺癌の発育形態と予後因子の推定が可能であるか，画像・病理所見をもとに予後調査まで行い，5年生存率まで算出し検討した．【対象と方法】1990年1月から1999年6月までに両病院外科で切除された3cm以下の原発性肺腺癌106例を対象とした．リンパ節転移は，各々No/N1/N2が93/6/6例，stageはIa/Ib/IIa/IIIaがそれぞれ94/1/6/6例．術式は葉切で郭清がR2a以上が55例，1葉切でR0-1が13例，部分切除が36例であった．検討項目は性別，年齢，腫瘍の大きさ，リンパ節転移，stage，分化度，病理学的にp，pm，ly，v．また，形態分類として，腫瘍におけるスリガラス濃度領域（GGA）の割合をHRCT上で肉眼的に50%未満と50%以上の2型に分類，辺縁の性状としてspicula・胸膜陥入像・腫瘍内気腔の有無についても検討を加えた．また，両群間のKaplan-Meier法による生存率を算出し，log-rank検定も行った．【結果】GGA 50%未満は76例（死亡25例），50%以上は30例（死亡1例）．5年生存率はGGA 50%以上の群は1.0，GGA 50%未満の群は0.68で両群間に明らかな有意差を認めた（P＝0.009）．GGAと共に生存率に寄与する因子として，リンパ節転移に，統計学的に有意な差が見られた．【結論】HRCT所見から腫瘍内のGGAの割合は，予後因子の推定に役立つと考えられ，それとともに縮小手術および手術そのものの適応決定に有用と考えられた．

P1-14 初診6ヶ月以上前の胸部X線に所見を有する肺癌症例の検討

奈良　道哉・大松　広伸・葉　清隆・仁保　誠治・後藤　功一・久保田　馨・西脇　裕・西條　長宏
国立がんセンター東病院　呼吸器科

【背景，対象】肺癌患者の診察において，過去の画像との比較読影は腫瘍の増殖速度に関する検討を行う上で，また読影力を向上させる上で有用である．当院を受診した肺癌患者で，過去の画像を取り寄せたところ，retrospectiveに6ヶ月以上前の胸部X線で当該部位に所見を認めた92症例に関する検討を行った．【結果】組織型別には腺癌68例，扁平上皮癌13例，大細胞癌5例，小細胞癌3例，腺扁平上皮癌2例，カルチノイド1例であった．切除された2cm以下の腺癌において野口分類上，A型1例，B型5例，C型31例であった．臨床病期別にはIA期33例，IB期23例，IIA期1例，IIB期4例，IIIA期7例，IIIB期8例，IV期16例であった．病変部位別には右上葉39例，中葉7例，右下葉14例，左上葉22例，左下葉10例であった．発見動機別には検診が60例，他疾患経過観察中が10例，自覚症状が22例であった．初めて所見を認めた時点から初診までの期間は6ヶ月から9年2ヶ月で，中央値1年6ヶ月であった．経過年数別に腺癌/その他の組織型を比較すると，1年未満のものは5例/8例，1年以上2年未満は25例/7例，2年以上3年未満は19例/4例，3年以上は16例/4例であった．3年以上の長期経過を有する腺癌のうちIA期5例，IB期6例，IIIA期1例，IIIB期2例，IV期2例であった．【考察】組織型別には腺癌が最も多かった．長期経過を有する症例のなかで，増殖速度の遅い小型腺癌の占める割合が比較的多いためと考えられた．存在部位では両上葉が多く，既存構造との重なりが読影上の問題点と考えられた．見落としを少なくするためには，左右差に注目したり，PA像とAP像の比較などの工夫が必要であると考えられた．

NII-Electronic Library Service